【243】

氏　名（本籍）	萩原俊彦（秋田県）
学位の種類	博　士（心理学）
学位記番号	博甲第 5057 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**大学生のキャリア選択における動機づけの役割**

主　査	筑波大学教授	教育学博士	櫻井茂男
副　査	筑波大学教授	文学博士	松井　豊
副　査	筑波大学教授	教育学博士	服部　環
副　査	筑波大学講師	博士（心理学）	佐藤　純

論文の内容の要旨

（目的）

本論文は，大学生のキャリア選択において賛否両論の見解が見られた「やりたいこと探し」とキャリア未決定との関連について,「やりたいこと探し」の動機づけ面に注目し, 検討を行った。以下の 2 つの目的に沿って，実証的な研究が行われた。

(1) キャリア選択時の心理的要因として「やりたいこと探し」の動機を取り上げ，その動機の自己決定性の違いについて検討する。

(2)「やりたいこと探し」の動機の自己決定性の違いが，大学生のキャリア選択に及ぼす影響を検討する。

（対象と方法）

本論文では，大学生を対象として 11 個の調査研究を実施した。まず，大学生がキャリア選択において「やりたいこと探し」をする動機を測定する尺度を作成し，各動機の自己決定性について検討した。その上で、「やりたいこと探し」の動機がどのような要因に規定されるか，分析を行った。さらに,「やりたいこと探し」の動機が，キャリア選択をしない・できないというキャリア未決定に対して，どのような影響を与えているかについても分析した。

（結果）

(1) 大学生が「やりたいこと探し」をする動機として，自己の充足感を高めるために「やりたいこと探し」をする「自己充足志向」，将来における自分の社会的立場を安定させるために「やりたいこと探し」をする「社会的安定希求」，周りに比べて出遅れており，追随せねばならないために「やりたいこと探し」をする「他者追髄」という, 3 つの動機のあることが明らかにされた。また, 3 つの動機の自己決定性は，高い順に「自己充足志向」,「社会的安定希求」,「他者追随」であることがわかった。これによって，同じ「やりたいこと探し」であっても，その動機には自己決定性の異なる複数の動機のあることが明らかになった。

(2)「やりたいこと探し」の動機がキャリア未決定に及ぼす影響に関しては，つぎのような結果が明らかとなった。まず, キャリア未決定の要因とされるパーソナリティ特性との関連では, 自己決定性の高い「自

己充足志向」は，キャリア選択に対し正の影響を与えるパーソナリティ特性（例えば，内的な統制の所在）により規定され，自己決定性の低い「社会的安定希求」と「他者追随」は，負の影響を与えるパーソナリティ特性（例えば，完全主義や他者依存に関連する不合理な信念）により規定されることが示された。つぎに，「やりたいこと探し」の動機の個人差を検討したところ，自己決定的動機群，拡散的動機群，低動機群の 3 パターンが見られた。さらに，「やりたいこと探し」の動機の個人差とキャリア未決定の程度・快適さ（不安や心配の少なさ）との関連を検討したところ，自己決定的動機群では未決定の程度が最も低く，快適さが最も高かった。拡散的動機群は未決定の程度が最も高く，快適さが最も低かった。低動機群は，一部の領域で未決定の程度が高い一方，快適さも高く，キャリア選択の面でやや特異な群であることが示された。加えて，動機の自己決定性の違いが大学生のキャリア選択に及ぼす影響について，対人関係の点から検討を行ったところ，キャリア選択のための「やりたいこと探し」においては，他者と積極的な相互作用を行うことが適応的であることが示された。

（考察）

本論文の結果から，これまで賛否両論の見解が見られた「やりたいこと探し」のキャリア未決定への影響に関して，動機の自己決定性の観点から新たな説明を行うことができたと考えられる。好きなこと・自分のやりたいことを仕事に結びつける志向が，現代の大学生の間で広く支持されているとしても，その志向を自分の志向として受け入れる時の自己決定のレベルは個人によって異なっていると考えられる。そして，キャリア選択において「やりたいこと探し」を行う場合，自己決定的な動機が相対的に優位であれば，キャリア未決定の面で問題を抱えにくく，快適さも高くなる。一方，非自己決定的な動機が相対的に優位であれば，キャリア未決定の面で問題を抱えやすく，快適さは低くなる。これらのことから，「やりたいこと探し」の動機の自己決定性の高低は，「やりたいこと探し」のキャリア決定に及ぼす影響の方向性を規定する重要な要因であると考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，大学生のキャリア選択における「やりたいこと探し」について，その動機の自己決定性という観点から，キャリア未決定に及ぼす影響を広範に検討した論文である。議論を動機の自己決定性に絞り込んだことで，仮説検証に一貫性のある優れた論文となった。「やりたいこと探し」の動機の個人差の検討については，クラスタ分析を研究毎に実施したため，研究間の比較が困難であるとの指摘はあるが，現実のキャリア選択を考慮し，当該動機の個人差がキャリア未決定に及ぼす影響を詳細に分析した点は高く評価できる。キャリア選択の現実的な問題について，動機づけの面から系統的に検討を行なった本研究の意義は大きいといえる。

よって，著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。